

## 主 題：迫り来る神のさばき 4

## 聖書箇所：ローマ人への手紙 1章24-32節

私たちはこれまで罪人は必ずさばかれるということを学んできました。罪を犯せばその報いは必ず自分に返ってきます。パウロはそのさばかれる理由を二つ挙げました。一つは19-20節に「神の存在を認識していながら、神を受け入れない罪ゆえにさばかれる」ということです。二つ目は21-23節、「神の栄光を辱める罪ゆえにさばかれる」と記されていました。この二つのさばかれる理由を挙げたパウロは、この24節からもう実際にそのさばきが起きているのだということを教えます。神はそれらの罪をご覧になって黙ってはおられない、確かに、みことばを見ると神の最後の審判があることは約束されています。すべての罪人が神の前に立ち一人ひとりその罪のさばきを受けなければならないという最後の審判があることを私たちは知っています。しかし、パウロがここで言っていることは、その最後の審判ではなく、今もうすでに神のさばきが起きているということです。

## ☆今、現在行われている神のさばき

24節を見ると「それゆえ」と記されています。この接続詞は「その結果、従って、だから」と、明らかに前の話を受けて彼は大切なことを語ろうとするのです。22-23節に記されている人間の罪深さ、邪悪さに対する神の応答、神の報いがこの24節から記されているのです。今日、私たちは24節から最後の32節まで、この箇所を通して、今現在、どのような神の罪人へのさばきが行なわれているのかを見て行きます。

## 1. 神を拒んだ報い 24-25節

一つ目にパウロが私たちに教えてくれるのは「神を拒んだ報い」です。24節「**それゆえ、神は、彼らをその心の欲望のままに汚れに引き渡され、そのために彼らは、互いにそのからだをはずかしめるようになりました。**」、私たちはもうすでに罪人たちの選択を見て来ました。彼らは神があわれみをもって神ご自身を明らかにし続けてくださっているにもかかわらず、その神に対して心を開こうとしません。その結果、彼らは益々罪の深みへとハマって行くのです。

## (1) 心の欲望のままに

24節でパウロは「**その心の欲望のままに**」と言いました。罪人が考えていること、彼らの取っている選択はこれです。「**欲望**」というのは、「欲しいと思う心、不足を感じてこれを満たそうと強く求める気持ち、また、不足を感じてこれを満たそうと強く望むこと」であると辞書は定義しています。これだけ物が豊かでも、これだけ欲しいものが手に入っても心は満たされていないということは私たちみなに分かっていることです。この世のいかなるものを手にしてもその時は喜びがあったとしても、それは永続するものではありません。パウロによれば、罪人が選択していることは心の欲望のままに歩み続けている、心にある不足している部分を何とか満たそうと続けていると言うのです。しかし、実際にここで使われていることば、また、パウロが言わんとしたことは、ただ不足を感じて何とかそれを満たそうとする、その気持ちよりももっと強い意味を含んでいます。バークレーという神学者はこのことばに関して「これは禁じられた快楽に対する情熱的欲望である」と言っています。何か不足しているからそれを補いたいという思いよりも、もっと罪深い思いであると。続けてこのように言います。「この世が与える快楽や事柄にのみ心を向けさせ、世界の創造主を全く忘れ去った人のしるしである」と。要するに、この世にのみ心を奪われ、神を思うことを全く忘れ去った人の人生であると言うのです。パウロが言うことは、罪人は神があわれみをもってご自身を明らかに示しておられるにもかかわらず、その神に対して心を開ざしている、神がすばらしい祝福を与えようとしておられるのにそれを拒んでしまっている、そして、彼らの選択はその心の欲望のままに生き続けることだと。確かに、私たちが見てきたように、人々は神を知ることができます。人々は神を信じることができます。しかし、残念ながら人々の選択は神を無視して神に心を向けることなく、この世が提供する快楽や事柄に目を向け心に向け続けているのです。向いている方向が違うのです。求めているものが違うのです。

パウロはここで「**心の欲望のままに**」と言いました。つまり、罪人の問題がどこにあるかということを確認に教えるのです。私たちの問題は「心」です。心が悪ければ必ず行ないも悪くなるのです。心が欲するからその通りに行なって行こうとするのです。心は行動となって現われて来ます。パウロが私たちに教えることは、心に問題があり心が正しくなければ、そこから出て来るものは間違った行為である、神を無視して自分の好きなように生きようとする選択の問題は心にあり、そのような心に私たちが主導権を託してしまうなら、私たちは益々汚れへと自らを導いて行くことになるということです。私たちの

問題は常に心です。私たちは自分の行動が何とか変わるようにといろいろな努力をします。しかし、残念ながらいかなる努力をもって、いかなる宗教をもって、いかなる鍛錬をもって、私たちの心を変えることはできません。だから、罪に対して私たちは絶望なのです。なぜなら、自分ではどうすることもできないからです。私たちは正しく聖い神が喜んでくださり受け入れてくださるような者にどうしてもなることができないのです。この聖書のみことばを見る時に、人間の、罪人の問題がどこにあるか明確です。心です。その心が求めているものは神ではなく罪なのです。求めているものは汚れなのです。自分の好きなように生きようとするその選択なのです。

## (2) 汚れに

「その心の欲望のままに汚れに引き渡された」とあるこの「汚れ」ということばは「不潔なもの、腐敗するもの」です。特に、墓の中のもの、腐ったものという意味です。だれもが好まない、だれも喜ばない、そのようなものに対してこのことばを使うのです。どこを見てもいいものがない、残しておきたいものがない、そのように腐り切ったもの、汚れ切ったものです。特に、この「汚れ」ということばを道徳的な意味において見ると、これは性的な不道徳と非常に密接に関連して使われています。エペソ4：19でパウロはこのように言います。「**道徳的に無感覚となった彼らは、好色に身をゆだねて、あらゆる不潔な行ないをむさぼるようになっていきます。**」と。今、私たちがこのローマ1章で見て来たように、パウロが言うように、罪人はその心の欲望のままに汚れに引き渡されている、彼らがしようとしていること、彼らの心が求めるものは、道徳的に無感覚になっているゆえに、自分の欲するままに選択を繰り返すことです。また、パウロは同じように、Iテサロニケ4：7でもこのように言っています。「**神が私たちに召されたのは、汚れを行なわせるためではなく、聖潔を得させるためです。**」。このIテサロニケ4章でパウロが繰り返し教えていることは、神のみこころはあなたがたが聖くなること、不品行を避けること、それぞれが自分のからだを聖く尊く保つこと、神を知らない異邦人のように情欲におぼれないことと、そのような罪の汚れについて話しています。その上でパウロは7節のことばを言うのです。つまり、聖書のことばが私たちに教えること、神が私たち人間に望んでいることは、神が喜ばれる正しい聖い生き方を継続して行くこと、そのように生きて行くことです。私たちは聖潔を得させるために神によって救われたのだと言うのです。しかし、残念なことに、このローマ1：24でもパウロが言うように、人は生まれながらにそのような道を選択しないで、自分の心の欠乏が満たされるために、自分の好きなことを選択している、神が喜ばれる生き方に反する道を選択していると言います。神しか私たちの心を満たすことはできないのです。しかし、私たちはそこに行きたくないのです。自分の好きなように生きて行きたいのです。いつまで経ってもこの世のものは心を満たしてくれないゆえに、いつまで経っても私たちは自分の欲するものを得ることはありません。そのことをただ繰り返しているのです。そのような選択を人間は繰り返しているのです。神ではなく神以外のものを追い求めているのです。

## (3) 引き渡された

では、その結果はどのようなになるのでしょうか？ローマ書に戻って24節を見てください。「**引き渡された**」とあります。これは大切なことばで繰り返し出て来ます。だれがしたのでしょうか？神がそのようにしたのです。だれをしたのでしょうか？罪人です。神が罪人を「引き渡した」と言うのです。言語学者のA・T・ロバートソンは「神の抑制の撤回は人を深みへと送る」と言います。神の抑制が撤回されること、その結果、人は罪の深みへと入って行ってしまおうと言うのです。この箇所でもパウロが教えていることは「神は罪人が行なおうとすること、進んで行こうとする道にどんな妨げも置かれない」ということです。決して、聖書は私たちに神が私たち人間を誘惑して罪を犯させるなどは教えていません。私たちが罪を犯すのは、私たちが罪を犯したいからです。そのような選択をするからです。ですから、人間が余りにも頑なに神に対して心を閉ざし続け、自分の好きなように生きて行こうとしているゆえに、神は「では、好きなように歩み続けなさい」と言われるのです。ヤコブ書で教えるように、罪は私たち罪人の選択です。みことばが私たちに教えていることは、罪人が神のあわれみのみわざに対して心を閉ざし続け、自分勝手に歩み続けようとするゆえに、神はその罪人が行こうとする道に妨げを置かない、人間は自分の思い通りに歩いて行こうとし、神はご自身の抑制を留められるということです。その結果、人間は益々罪の深みに陥って行くということです。詩篇81：12に「**それでわたしは、彼らをかたくなな心のままに任せ、自分たちのおもんばかりのままに歩かせた。**」とあります。神の働きがあるのに人間の選択はあくまでその神を拒み続けることであり、その頑なに心のゆえに、神は人間の好きなようにさせた、「**おもんばかりのままに歩かせた**」と言うのです。また、新約聖書の「使徒の働き」14章にこのようなことが記されています。ルステラという町でパウロとバルナバの奇蹟を見たその町の人々は彼らに対して「**神々が人間の姿をとって、私たちのところにお下りになったのだ。**」(4：11)と言って彼らを崇拜しようとしています。そこでパウロとバルナバは彼らを説き伏せてこのように言います。4：15-16「**皆さん。どうしてこんなことをするのですか。私たちも皆さんと同じ人間です。そして、あなたがたがこのようなむなしいことを捨て**

て、天と地と海とその中にあるすべてのものをお造りになった生ける神に立ち返るように、福音を宣べ伝えている者たちです。:16 過ぎ去った時代には、神はあらゆる国の人々がそれぞれ自分の道を歩むことを許しておられました。」と。同じことを言っています。自分の好きなように生きることを神は許されたと。なぜなら、人々がそのように欲するからです。結局、人間は自分の思い通りに生きて行こうとするのです。好きなように生きて行きたいのです。干渉されたくないのです。そのように心を頑なに神を拒み続けているから、神は罪に対する抑制を留められるのです。その結果、人間は益々罪を犯す者へと変わって行くのです。神は心の欲望によって生きるという選択の邪魔をなさらないから、その結果、人間は大変な問題を背負うこととなります。なぜなら、自分の好きなように生きて行く生き方に、自分が求めている幸せも満足もなく、却ってそこには苦しみ悲しみ、絶望があるからです。そのことはもう私たちみなが知っていることです。まさに神からのさばきだと思いませんか？神は私たちを好きなように生きさせます。しかし、そこには私たちが求めているものは何もないのです。そこにあるのはみじめさ、空しさだけです。そして、自分の人生を振り返ってみて、いったい、自分の人生は何だったのかと嘆くのです。そして、前にも見たように、その人たちの悲劇は人生において神の祝福を逃してしまっただけでなく、永遠において神の救いを逃してしまっただけです。このような悲惨な人生を歩んでいる人々が私たちの周りにあふれているのです。

これらのことがパウロが1：24で先ず私たちに教えている、今現在における神のさばきです。このさばきがいつ始まったのか、恐らく、アダムとエバが罪を犯してからでしょう。それ以降、人間は同じように、神のみこころに従うよりも自分の好きなように生きて行きたいとして、神の前に罪を犯し続けて来たのです。これまでのことをまとめると、今現在、私たちのうちに起こっているさばきは、人間は好き勝手生きている、その結果、人間は自分自身の人生にどのようなことを背負い込んでしまっているか、それは不満足であり、自分が望んでいる幸せも満足もなく、却ってそこには苦しみ悲しみ絶望が付きまとっているのです。このように人々が自由に好きなように生きているにもかかわらず、なぜ、人々の心は満たされないのでしょうか？これだけいろいろなことがある程度自由になる国に私たちは住んでいるながら、なぜ、多くの人々は絶望感を抱えながら生きているのでしょうか？自分の人生を振り返って、すばらしい人生だったと神に感謝する人がなぜ少ないのでしょうか？なぜ、人生を後悔するのでしょうか？神のさばきだと思いませんか？そこには祝福がないのです。神は私たちにこの地上にあっても心から満足することのできる生活を、人生を約束してくださいました。神しか与えることの出来ない祝福をもって私たちに祝福してくださいと神は言われました。その祝福をいただきながら日々を生きて行くことができるのです。しかし、悲しいことに、多くの人たちがその神に対して心を閉ざし、神を拒み続けるゆえに、その祝福を今のこの生きている日々において経験できないのです。そして、それだけでなく、その人に待っているのは最後の永遠の審判です。永遠のさばき、永遠の滅び、永遠の地獄です。何というあわれなことでしょう。これが私たちの愛する人々に神が警告されていることです。

#### (4) 互いにそのからだをはずかしめるようになった

もう一度、ローマ1：24を見てください。「引き渡された」後、人々はどのようなことを行なうようになったのでしょうか？「そのために彼らは、互いにそのからだをはずかしめるようになりました。」。そのような選択をしているから神は抑制を留められ自由にさせたために、罪人は「互いにそのからだをはずかしめるようになった」と言います。「はずかしめる」とは「屈辱、不名誉な」という意味です。人々は神の栄光のために使うべき自分たちのからだを、その目的のために使おうとしないで、自分のために使うことによって神の前に罪を犯してしまっていると言うのです。神は私たちのからだだけではありません。私たちの性も造られました。神はセックスも神の栄光のために造られました。しかし、人間はその目的を無視して、自分勝手な目的のためにそれを乱用し始めるのです。未婚者による性の問題、不倫、そして、最近の警視庁の発表によると、未成年に対する様々な性的誘惑、特に、考えられないようなことですが、中高生女子たちが電話などを使って誘惑をするなど、悲しいことに私たちの周りにそのようなことがあふれています。私たちがしっかりと覚えなければいけないことは、神はそのように自分の快楽を満たすために性をお造りになったのではないということです。それは夫婦の間に与えられたものです。それが神の計画です。悲しいことに、その神の計画を無視して好きなように生き続ける、その結果、そこには神の祝福がないばかりか、この教えに背くことによって、後悔してもしきれない痛みを自ら背負い込んでしまっている人々がどれだけいることでしょうか。聖書は私たちに明らかに教えます。神を拒んだ人々は益々罪の深みへとハマって行っていると。

その原因、理由はどこにあるのでしょうか？25節でパウロはこのような問題の責任がどこにあるのかを明らかにしています。「それは、彼らが神の真理を偽りと取り換え、造り主の代わりに造られた物を拝み、これに仕えたからです。造り主こそ、とこしえにほめたたえられる方です。アーメン。」と。もう一度、パウロはここで、このような罪の責任は神ではなくそれは罪人自身にあるということを明確にします。「真理を偽

りと取り換え、造り主の代わりに造られた物を拝み、これに仕えたから」、そこに問題があると言うのです。すでに私たちが見てきたように、神の存在を認識していながらその神を受け入れようとしない罪、神の栄光を辱めるその罪、神が真理を知らせてくださったにもかかわらず、その真理に目を閉ざして人間は偽りを受け入れたのです。真理でないものを真理として、創造主でないものを創造主として崇拜し、自分に都合の良い神、偽りの神を造ってその神に仕えたのです。このような罪を犯したから人間は益々罪の深みにはまっているとパウロは言います。私たちの行なってきた選択は考えられないような非常に愚かなことでした。そして、そのような選択を今も行なっている人々がいるのです。パウロは言います。すべてのものをお造りになった創造主なる真の神こそがとこしえにほめたたえられるに値する唯一のお方だと。アーメン、その通りなのです。そのことを再びここで明らかにするのです。神の恵みによって救われた私たち一人ひとは神によってこの造り主である方をとこしえにほめたたえるものへと変えられたのです。私たちは日々、その置かれているところで精一杯そのことを為して行く責任があります。

## 2. 神の報いの事例・実際 26-32節

26節から、パウロは人間が経験している様々な罪の報いを実際の例をもって私たちに教えて行きます。24-25節では「神を拒んだ報い」があるということを言いました。そして、この26-32節では、その報いというものの事例を明らかにするのです。どのような報いを人々は経験しているのでしょうか？どのような問題、どのような報いを人間は自らに招いてしまったのでしょうか？

### (1) 性的倒錯

26節に「**こういうわけで、神は彼らを恥ずべき情欲に引き渡されました。…**」とあります。ここに2回目の「**引き渡された**」ということばが出て来ました。24節では「**汚れに引き渡された**」、そして、26節では「**神は彼らを恥ずべき情欲に引き渡されました**」と言います。先ほども見たように、神を拒んだ罪人は自分の性的願望に沿って生きようとする、性的に益々自分の思い通りに生きる人生を歩み始めるということです。それがこの社会の道徳に背く行為であったとしても、自分がそれをしたいからそのような選択をして行くのです。自分が満足すること、自分が喜ぶことなら、それが道徳的に反していようと構わないのです。パウロたちが生きていたこの時代、1世紀のローマの詩人であったユベナリスという人物がその当時のローマの様子に関してこのように記しています。「**汚れのない純潔な婦人を見出す幸運をつかむ可能性を信じない**」と。つまり、その当時、すべての人が性的に墮落していたのです。だから、聖い純潔な婦人を見つけ出すことは不可能だと言うのです。どれほどその社会が性的に汚れていたのか、そのことを私たちは少し鑑みることができます。神を拒んだゆえに人々はその心が満たされないからいろいろなもので自分の心を満たそうとします。そして、多くの人々がそのような性的なものに心を向けて、それらで自分を満足させようとする、これはローマの時代だけではありません。今の私たちのこの国においてもどの国においても同じことが起こっています。

### ○同性愛

パウロはここである特定の罪、この性的倒錯のひとつのことを挙げています。それは**同性愛**です。そのことをパウロはこの26-27節で教えるのです。「**こういうわけで、神は彼らを恥ずべき情欲に引き渡されました。すなわち、女は自然の用を不自然なものに代え、:27 同じように、男も、女の自然な用を捨てて男どうしで情欲に燃え、男が男と恥ずべきことを行なうようになり、こうしてその誤りに対する当然の報いを自分の身に受けているのです。**」。性的に好き勝手な生き方を始めた者はどうなるか、彼らは同性愛も喜んで行なうようになると言います。神学者バークレーは「ローマ皇帝の初めの15人中14人はみな同性愛を行なった」と、非常に驚くべきことを言っています。同性愛者による結婚、今では珍しくなくなりました。2008年5月14日、アメリカのカリフォルニア州の最高裁が同性愛者の結婚を許可しました。同性愛者の結婚を認めている国は世界中にたくさんあります。ベルギー、デンマーク、オランダ、南アフリカ、また、今検討中のイギリス、カナダ、フランス、ドイツ、ポルトガル、スペイン、スイス、悲しいことに、このような生き方を人々は、また、国のリーダーたちは認めようとしているのです。何十年か前に、同性愛者たちの教会が存在するということを聞きました。最近、そのニュースを調べてみると驚きでした。その数は驚くほど増えています。オセアニア地区ではニュージーランドやオーストラリア、アジアではフィリピンに、アフリカでは南アフリカやナイジェリアに、中南米においてはニカラグア、アルゼンチン、チリ、ウルグアイ、ブラジルで、北米ではカナダ、アメリカ、メキシコで、ヨーロッパでは、イギリス、フランス、ドイツ、ルーマニア、スコットランドで、そのような教会が存在するのです。彼らはみなこのように言います。「同性愛は罪ではない」と。みな知っています。今、私たちが見ているローマ書1:26を見たとき、多くのクリスチャンたちは同性愛は罪だと主張している、でも、彼らはこのみことばを見て「いや、違う」と言うのです。ニューヨークにあるユニオン神学校のジョン・マックニールという非常勤の心理学の教授はこのような説明をしています。彼は同性愛を容認しサポートしています。彼は同性愛に反対する新約聖書の箇所がこのローマ1:26から由来したということ

知っていて、この26節で「不自然」と訳されていることばについてこのように言います。「パウロがこの文節によって何を言いたかったのかを二つの解釈によって弁明することができる。一つは『新たな性的快楽にふけるために自らの性欲を超える異教徒、その個人を指している』と。もう一つは『同性愛関係を持つことを律法によって禁じられていた選民たちの自然を指している』と。どちらの理由を聞いてもどうしてそのような説が出て来たのか私たちは不思議に思います。私たちがすることは聖書が何を言っているのかを見ることです。

この26-27節を見たとき、「すなわち、女は自然の用を不自然なものに代え、27 同じように、男も、女の自然な用を捨てて…」とありますが、この「自然の用」とはどのような意味でしょうか？先ず、この「用」ということばをギリシャ語の辞典で調べてみると、明らかにこれは性的関係に使われることばで、しかも新約聖書ではこの1:26と27にしか出てこないことばです。ですから、この26、27節にある「用」というのは明らかに性的な関係のことです。そうすると、もう一つ、この文脈を見ると、26節は「女は自然の用を不自然なものに代えた」と、自然なことをそれに反することに代えてしまった、27節には「同じように、男も、女の自然な用を捨てて男どうして情欲に燃え、」と、つまり、27節では男のことです。男が自然なことをそれに反することへと代えたことです。しかも、27節では「不自然なものに代えた」ことがどういう意味なのかを説明しています。「男どうして情欲に燃え、」と言います。明らかです。このことばが教えている意味、また、この文脈が私たちに教えていることは明らかです。神は男女をお造りになった、何のためにか、男性の助け手として女性が造られたのです。そして、男女において結婚を認められました。ふたりは結婚してふたりはひとりになるのです。この「ひとりになる」というのは性的な関係を結ぶという意味もあります。そのことを言っているのです。その自然のことを不自然なことに代えてしまったというのです。どのようなことか、女性が女性と情欲を燃やす、男性が男性と情欲を燃やす、神はそのように性を造らなかったということです。人間は神の創造に全く反した選択をしているというのです。先ほど見たように、これはどんなに『新たな性的快楽にふけるために自らの性欲を超える異教徒、その個人を指している』と言ってもどこにそんな根拠があるのでしょうか？どうしてこれが「選民たちのことだけ」と言えるのでしょうか？ですから、この26、27節で明らかに神は間違いなく同性愛が罪であることを教えています。それが聖書の教え、神の教えです。

かつて「ニューズウィーク」が、同性愛者はある種の病気である、そのような脳をもって生まれて来たのだという説を出しました。最近、同性愛者たちがそれを否定しています。私たちは罪を犯してもいないし、病気でもない。その説を読んで驚きました。確かに、彼らは病気ではありません。彼らは罪を犯しているのです。なぜなら、聖書は明らかに同性愛は罪だと教えているからです。神のみこころに反しているのです。ですから、27節の後半に「こうしてその誤りに対する当然の報いを自分の身に受けているのです。」とあります。同性愛が原因で様々な性的な病気が蔓延しています。みことばは教えます。神のみこころに反して、道徳に反する選択をして人間が快楽を求め続けるゆえに、その結果、様々な問題が人々の間に、社会の中に入り込んで来たこと、パウロが言うように、そのような誤った行為に対する当然の報いが彼らの身に起こっている、その誤りに対する当然の報いを自分の身に受けているのです。私たちがはっきり覚えておかなければいけないことは、この同性愛は昨日今日に始まったことではありません。アブラハムの時代にも存在しました。ソドムとゴモラという町が滅ぼされたとき、ロトを訪問した人がいることを知った町の人々はロトのところに来て「今夜おまえのところに来て来た男たちはどこにいるのか。ここに連れ出せ。彼らをよく知りたいたいのだ。」(創世記19:5)と言いました。この「知りたいたい」というのは、彼らに質問して彼らのことをよく知りたいたいというのではなく、彼らのことを性的に知りたいたいということです。同性愛が横行していたのです。それで神は、もちろん、その罪だけではありませんが、それゆえに、ソドムとゴモラを滅ぼされました。どの時代であっても、このように神のみこころに反することに対しては、神はそれを厳しくさばかれます。私たちは私たちがどのように思うかによって生きるのではなく、神がどう言われているのかによって生きなければいけないのです。私たちのこの地上の生活における闘いは、自分のしたいことと神のみこころとそのどちらを選択するかです。私たちは常に自分のしたいことを選択したいのです。だから、いつも問題が生じるのです。しかし、私たちクリスチャンは神のみことばに従って行く時に、神の祝福をいただきます。でも、神に反する時、私たちはその祝福を逃しています。正直に言って、そのことはクリスチャン自身が分かっていることです。

このことを話して、次は28節です。人々が神の前に罪を犯すゆえに、神は彼らを性的倒錯へと送られたということを見ました。パウロは人間が神を拒んだゆえに陥っていった罪の恐ろしい状態を表わしています。このように神が彼らを汚れに引き渡されたゆえに、このような状態へと彼らは陥ってしまった、まさに恥ずべき情欲に神は彼らを引き渡したのです。それゆえに、人々は神のみこころに反する恥ずべき状態へ陥ってしまっているのです。最初に話したように、今、私たちが真剣に考えなければいけないことは、このようなことが不思議なことであるかのように思わなくなってしまうかという

ことです。同性愛というのも一つの生き方であるとし、同性愛を売り物にしている人たちを見ても私たちは別に何とも思わない、もちろん、同性愛だけが罪ではありませんが、みこころに反していること、神に逆らっていることはみな罪です。明らかに、このような生き方に対しては聖書が罪だと教えていることを私たちはしっかり覚えることです。

## (2) 良くない思いと良くない行ない

続けて、28-32節には、彼らが罪を犯して神に逆らい続け、神を拒み続けるゆえに、神は彼らを「**良くない思い**」と「**良くない行ない**」へと送られると記されています。すなわち、神がその罪に対する抑制を留められるのです。人間がそのように罪を選択するから神はその邪魔をしないのです。その結果、人間はどういうことをして行くのか、28節には「**また、彼らが神を知ろうとしたがらないので、神は彼らを良くない思いに引き渡され、そのため彼らは、してはならないことをするようになりました。**」と記されています。実は、このみことばは非常に大切です。それでこの28節をギリシャ語から直訳するとこのようになります。「神を知識において持ち続けることを良いと認めなかったため、神は彼らを不適格で墮落した腐った汚れた心に、また、ふさわしくないことを行ない続けるために引き渡された」と、このような訳になります。私たちが見ておきたいのは、この28節に「**彼らが神を知ろうとしたがらない**」と訳されているところです。これは何か感情的に「何となく気が向かない、そのような気がしない」とそのようなことを語っているのではありません。この「**知ろうと**」ということばは非常におもしろいことばです。パウロがよく使うことばです。これは「**まず検査をして、その結果、それを承認する**」ということばです。ただ何となく知るとか、何か本を読んで知るとか、そういうものではない、検査をして、その検査の結果、それを認める、承認するという意味です。つまり、罪人がしたことは、神に関することを検査して、その結果、彼らは神など私は必要としない、知るに値しない、この神と個人的な関係を築くことなど私には必要ではないという結論に達したというのです。

しかも、ここに「**神を知ろうと**」と「**神**」ということばが置かれているのは、このことばを強調するためです。罪人たちの神に対する罪をここで明確にしようとしたのです。見て来たように、彼らは神のことを知っていながら、その神を信じることを良いこととは認めなかった、この神は信じるに値しない神だという結論に至ったというのです。恐ろしいと思われるかもしれませんが？パウロは常にそのことを繰り返し私たちに教えてくれました。神がご自身を隠しておられるのではないのです。私たちが神に背を向けているのです。私たちが神のことを心から求めるなら、神は私たちに真理を教えてくださいます。でも、私たちはそれを必要としないと言うのです。私たちがそれを求めないのです。ですから、パウロはここで、彼らが神を知ろうとしたがらない、それを見た上で、検査した上で、調べた上で、「あ、これは必要ない」という結論に到達したというのです。だから、神は何をなさったのか、そのような罪を犯しているがゆえに、神はそのような罪人を良くない思いに引き渡された、そのために彼らはしてはならないことをするようになったと言います。自らの意志で彼らは神を拒む選択をしたのです。この選択は自ら進んでした決心だった、だから、問題だと言うのです。彼らは神を信じることよりも他のことを選択したのです。だから、その結果、「**神は彼らを良くない思いに引き渡され**」ました。また、ここでも「**引き渡され**」と同じことばが出て来ました。24、26、28節に出て来ました。彼らは良くない思いをもち、良くないことをするようになったと言います。まず、良くない思いに引き渡した後、彼らはしてはならないことをするようになったと。この「**良くない思い**」というのは、値打ちがない思いです。全く価値がないのです。そのような価値がない思いがもたらす行ないは当然価値がないものです。空しいものでしかないのです。神の前に全く価値のない行ないしかできないということです。なぜなら、彼らの心がそのような状態にあるからです。最初に見たように、心に問題があるとそれは行ないに表われます。パウロはそのことを言っているのです。神を拒んだ人々が選択することはすべて空しいことだと。だれ一人として神の前に価値ある正しい選択をすることはできないのです。

それゆえに、この後にリストが出てきます。この29節以降、その誤った行ないというものが記されています。「**29 彼らは、あらゆる不義と悪とむさぼりと悪意とに満ちた者、ねたみと殺意と争いと欺きと悪だくみとでいっぱいになった者、陰口を言う者、30 そしる者、神を憎む者、人を人と思わぬ者、高ぶる者、大言壮語する者、悪事をたくらむ者、親に逆らう者、31 わきまのない者、約束を破る者、情け知らずの者、慈愛のない者です。**」と、このリストはすべて共通しています。つまり、ここに記されているリストは神よりも自らを高く上げた人々の生き方、神よりも自分を優先した人々の生き方なのです。神の前にへりくだるのではなく、神を自分よりも低く下げた者、自分を神の上に置いた人の生き方そのものです。

「**不義**」：神と人に義を行うよりも自分を中心に生きる人のことです。今、私たちが見てきた罪人のすべてです。

「**悪**」：自分の悪に人を引き込んで、自分と同じように悪を行なわせようとする人のことです。仲間を作りたいのです。自分の悪を悔い改めるのではなく、その悪に人々を引っ張り込もうとするのです。



「むさぼり」：自分の利益だけを考えてそれを追求する人です。自分のことしか考えていないのです。

「悪意」：悪いことを考え続ける人です。自分のことしか考えていない、自分が一番なのです。

「ねたみ」：自分にないものをうらやむことです。

「殺意」「争い」「欺き」「悪だくみ」、これらは全部自分が中心です。自分が欲しいと争います。

「陰口を言う者」：陰で人を中傷する唇、舌です。

「そしる者」：同様に、悪口を言う、批判をします。そして、その人をだめにしようとするのです。

「神を憎む者」：自分にとって神は邪魔者であるというのです。恐ろしい傲慢さです。神など必要としない、神がなくてもやって行けるというのです。

「人を人と思わない」：そのように傲慢な人ですから、当然、人間関係にも現われます。人に対して非常に横柄な態度をもって接します。

「高ぶる者」「大言壮語する者」：その人の内には非常に強いプライドがあるのです。なぜなら、自分は神よりも偉いからです。

「悪事をたくらむ」：より新しい罪のスリルを味わいたいと思っているのです。

「親に逆らう」：神に逆らう者です。当然、自分の親にも逆らいます。なぜなら、自分が中心だからです。自分のしたいことをしたいからです。権威に従いたくないのです。

「わきまのない者」：無知な人間です。何をすべきかを考えないでしたいことをしているのです。

「約束を破る」：自分が中心だから約束を破っても何ともないのです。

「情け知らず」：人への愛に欠けているのです。イエスが言われたことは自分を愛するように人を愛さないということです。なぜなら、そこが人間の弱さだからです。

「慈愛のない者」：この時代は人は平等には扱われていませんでした。あわれみの気持ちのない人が溢れていたのです。みな自分のことしか考えなかったからです。

これらのリストを見て言えることは神を拒んだ人々の生き方です。神よりも自分を優先している人々です。パウロはこうして神のことを自分の意志をもって拒み続ける、逆らい続ける、そういう人々に対して神がなさったこと、それは彼らが益々自分中心に、自分勝手に生きて行く人生を歩むように、その障害を除かれたと言うのです。そのような生き方を彼らは行ない、これからも行ない続けて行くと言うのです。さばきの現実がここに記されています。私たちクリスチャンはそういう生き方から解放されたのです。クリスチャンの生き方、それは私たちの選択、私たちの語ることば、私たちの考えること、私たちのすべてが神に喜ばれることかどうかを考えて選択するのです。私たちが考えることは、これによって人の徳が高められて行くのか、これによってキリストの栄光が現われて行くのかということです。私たちの物差しはすべて神が喜んでくれるかどうかです。それまでの生き方はどうすれば自分を喜ばせるか、それしかなかったのです。

そして、32節に警告があります。「**彼らは、そのようなことを行なえば、死罪に当たるという神の定めを知っていながら、それを行なっているだけでなく、それを行なう者に心から同意しているのです。**」と、さばきの現実がここに記されています。みことばは警告します。そのようなことを行なえば当然、神の前でさばかれると。なぜ、彼らがさばかれるのでしょうか？それは、彼らも同じような罪を犯しているからです。当然です。このような罪を犯していながら神のさばきがないなどあり得ないことです。神は確実にその罪をさばかれます。それだけではない、そのような罪を犯している人に対して、それを認め、是認し、それを奨励している人々にはもっと大きなさばきがあると言っているのです。神は絶対に罪を見逃されません。罪に対しては正しい審判を下されます。だから、神なのです。そのことをパウロは私たちに繰り返して教えるのです。そして、私たちが気付かなければいけないことは、神が私たちから隠れておられ神を知ることができないのではない、神がご自身を明らかにしておられるにもかかわらず、私たちがその神を自分の意志をもって拒み続けている、この罪が大きいということです。そのような人々には、間違いなく神の審判が下るのです。ヤコブは「ヤコブの手紙」4：17で「**こういうわけで、なすべき正しいことを知っていながら行なわないなら、それはその人の罪です。**」と言いました。正しいことを知っていながらそれをしなかったならそれは罪だと言うのです。自分がしているならそれは改めればよい、人がしてそれに対して何も言わないのなら、それは間違っていると言います。

#### ○すべては救いの機会を与えるため

パウロは私たちに、人間が神に背き続けているゆえに、神はこのような結果へと人々が陥って行くことをよしとされていると言います。それは、彼らが神に対して頑なであり続けるから、神に逆らい続けているからです。しかし、神は不思議なことを私たちに教えられます。確かに、このような罪の中を歩んでいる人々がたくさんいます。その中を歩んでいる人々はそこで本当に満足しているかということ、ずっと見て来ているようにそこには満足はないのです。そのような神のさばきを今与えることによって、神はその人々に目を覚ます機会を与えているのです。神はもう既にその人たちを滅ぼしてもよかったの

です。でも、滅ぼさずに神はまだその人々に悔い改めのチャンスを与えてくれているのです。もし、この中にまだ神に対して心を閉ざし続け、逆らい続けている人がいるなら、神はあなたに警告しています。あなたの心は満たされていないはず。あなたの心には神が約束された祝福はないはず。でも、遅くはないのです。手遅れではないのです。今、あなたが神の前に立ち返るならば、神はあなたのすべての罪を赦して生まれ変わらせてくださるのです。人生をやり直すことができるのです。全く新しい歩みをなすことができるのです。「**主はエジプト人を打ち、打って彼らをいやされる。彼らが主に立ち返れば、彼らの願いを聞き入れ、彼らをいやされる。**」とイザヤ書19:22にあります。神はエジプト人を打ちました。でも、それは彼らが嫌いで彼らを滅ぼしてしまうのではなく、彼らに救いの機会を与えるためだと言います。様々な困難や苦しみ、渇きを覚える時、私たちはどうするでしょう？そのような時に私たちの目は神に向きます。神はそのようなあわれみをもって、これほど神に逆らい続けている者に、まだ救いの手を差し伸べてくださっているのです。驚くべき神です。驚くべき恵みです。

今、私たちは「**神は彼らを引き渡す**」ということを3回見て来ました。神は神を故意に拒んだ者たちに、彼らにふさわしい報いを与えておられます。しかし、このように神に逆らい続けている者たちには救いの機会が永遠に失われたのかというと、実は、そうではないのです。神はそのような罪人に対しても救いの機会を備えておられるのです。なぜなら、今、みな好きなように生きています。あなたもそうかもしれません。そして、あなたは気付いているはず。そこには自分の求めているものはないと。それは神の深いあわれみなのです。あなたに気付かせようとしているのです。あなたの今の生き方には答えがないと。あなたが神のところに立ち帰るまであなたが探しているものはないと。そして、あなたが神に立ち帰るなら、神はあなたのすべての罪を赦し、あなたを生まれ変わらせてくれる、これが神の恵みなのです。なぜ、私たちが今日も生きていのでしょうか？このような罪深い私たちが生きていのでしょうか？神はあわれみをもってあなたにその救いの機会を与えてくださっているのです。「**主を求めよ。お会いできる間に。近くにおられるうちに、呼び求めよ。：7 悪者はおのれの道を捨て、不法者はおのれのはかりごとを捨て去れ。主に帰れ。そうすれば、主はあわれんでくださる。私たちの神に帰れ。豊かに赦してくださるから。**」(イザヤ55:6-7)、これが神の恵みなのです。これが私たちの神なのです。こんなすごい神がおられるのです。あなたを造り、あなたを愛し、あなたを救いへと導いてくださる神です。このように拒まれ続けても、このように人々が逆らい続けても、なお、救いの御手を差し伸べておられる神がおられる、なぜ、その方に逆らい続けるのでしょうか？なぜ、その方に心を頑なに続けるのでしょうか？今すぐ、この方の前に罪を悔い改めて、この救いを求めて出て来なさい、神はあなたを救ってくださる、あなたの罪を赦してくださる、あなたに新しい人生を与えてくださいます。こうして神はあなたを呼んでおられます。あなたはこの神の招きにこれからも逆らい続けるのでしょうか？これまで逆らって来られた皆さん、今日もまた、あなたはこの神に逆らい続けるのでしょうか？主はあなたの罪を知った上であなたに救いを備えてくださり、その救いへとあなたを招いてくださっています。今、出て来ることです。心からあなたの罪を悔い改めてこの救い主を心から受け入れるように。そのときに、主はあなたを赦してくださるのです。

救われている皆さん、こんなにすごい神が私たちの神です。そして、このメッセージこそ、この世の中が必要としているメッセージです。世の中は聞きたくありません。しかし、このメッセージこそ彼らが聞かなければいけないメッセージです。なぜなら、ここに彼らの本当の希望、救いがあるからです。